

ワークショップ部分の鷺見の速報的メモ

鷺見哲也

これは、手元のメモ・写真のみで構成しているので、詳細はまだまとまっていないことを先に記します。

=====

1. ワークショップ実施時の概況

- ・多くの方=50 数名（70 名という話も）が出席
- ・男女・年齢層も広い。
- ・防潮堤問題については、現計画支持の方も少ないが出席。
- ・ワークショップの前に、以下の事が行われ、広い視野の醸成を行われた。

現防潮堤計画の解説

修正案の提案と質疑

奥尻島の 20 年についての情報提供

黒潮町の避難対策

大槌地域防災 WS などの紹介

=====

2. ワークショップでの主な目標

背景として、防潮堤問題は防潮堤の計画だけの問題ではない。高さだけの議論をすると、安全の評価軸だけでの評価になり、堤防は高いほどよい、ということになる。

防潮堤に限らず事業の意思決定については、安全のレベルの程度は、他の評価軸を並べ、どの案がどの評価軸に対してどの程度メリット・デメリットがあるのかを確認した上で、トレードオフとなる複数の評価軸があるなかで決められるべきものである。

このワークショップでは、次の 3 つ（主には先の 2 つ）を目標とした。

- ・その評価軸、つまり何を大切にするか、という項目そのものをリストアップして共有す

ること、

- ・それぞれの評価軸（のグループ）について、どの程度の人がどの程度大事だ、と
思っているのか、その重みの分布を見て共有すること、
- ・それを眺めながら、まちづくりのありように着いて議論し共有すること、

といった一連の共有のプロセスを可視してみることにあった。

=====

3. ワークショップでやったこと。

参加者が7班に別れる。

(1)項目出し：「何が大切か」「この町に何があるか」リスト。

- ・防潮堤のみならず、まちづくりに際し、重要なこと、大切にしたいこと、をリストアップし、班内で語る。
- ・何が挙がったのか各班から発表、全体で共有。驚見が、どんなカテゴリの内容が挙がったのかを整理。

(2)項目のグループ化と重み付け

- ・各班で挙がった項目を、つながりが近いカテゴリ（グループ）に分ける。
- ・一人6つのシールを、重要・大切と思うものに、挙がった項目にシールを貼る。6つのシールを、重みに応じて複数貼り付けて良い。
- ・その数が多い順に1位と2位のグループを報告。

(3)めざすまちづくりについて議論

- ・その状況を見て、班内で、どんなまちづくりを目指すのかを議論。
- ・その結果をシンプルに報告。

=====

4. 全体としての項目出しと、その重み。

次の様なところに収まるものがリストアップされ、整理した。

◎は各班で1位の項目（グループ）

○は各班で2位の項目（グループ）

リスク軽減：命・財産◎

施設防災◎＝ハード：防潮堤、防潮林、住まい方

避難◎○○＝ソフト

ハード（避難路・タワーなど）

（避難しなくてもよい方法も、という意見も）

防災教育◎、災害記憶の継承

文化（の継承）＝自噴井、食、音楽、民芸、

風景（生活、観光と関連）

自然（山・川・海・湧水）○○

お金◎：防災の費用（維持費用＝将来税負担）

（「持続可能な未来」と関連）

（出ていないが、世帯の負担、業のコストなどもある）

仕事・産業○

漁業

観光

（商業、加工業などなど）

復興の速度（住まい、漁業の環境攪乱）

持続可能な未来（50～100年の将来・子孫へつなぐこと）

後世への負担

地域のつながりとコミュニケーション（他の多くと繋がる）

コミュニティ○＝地域のまちづくりの継承

みんなが一人ひとり考える◎（防災教育と繋がる）

住民の意見が互いに見えること◎

幅広い年齢層を持つこと（若者の定着）

=====

5. 各グループの目指す姿

最後に発表された、目指すまちづくりの姿については以下のとおり。

1 G：支援者も含め大槌を学ぶ。

- 2 G：過信しないまちづくりー後世へつなぐ。
- 3 G：安心（すべての要素）。
- 4 G：高台移転、避難路を。
- 5 G：命を大切にすること。
- 6 G：知ること、環境、お祭り＝交流人口を。
- 7 G：元気な町へ、ソフトがあってハードが活きる。

=====

6. 振り返り

(1)WS の目標の達成について：

- ・ 目指す姿を議論するには、項目間のトレードオフの関係を整理し、どういうアイデアがそれを緩和できるのか、など、深い議論が必要である。今回はそれは難しいだろうと考えていてそのとおりになったが、グループ単位でも「何が大事か」ということにばらつきが出て、全体としてみても、その分布を眺めることができたのは良かったと思う。
- ・ 何より、「みんながどう思っているのか」を共有できたのではないかと考える。
- ・ グループ内では、細かい話が議論できたが、全体ではそこまで共有することはできなかった。

(2)項目出しと重みの分布について：以下のとおり。

- ・ リスク軽減（ハード・ソフトでの対応）と、コミュニティのあり方に関するものに、多くが集まった。
- ・ リスクは、ハードでも防潮堤だけでなく高台移転の主張が見られた。避難はコミュニティとつながる問題と、避難路・タワーのような避難のハードの観点も主張された。
- ・ その他に上位にあったのが、自然資源・風景、仕事産業、将来の税負担、防災教育（これはコミュニティとも関係）であった。
- ・ その他には生活文化、復興速度（住まい、工事による漁業環境攪乱回復）などが挙げられた。
- ・ 継承、将来に繋がること、といった持続可能性の概念、キーワードがそれぞれの項目に埋め込まれていた。時間軸の概念が直交している。
- ・ 一方で立場の属性の広さによる視点（個の立場、集団の立場、公の立場の）いずれの立場での項目出しも無意識に行われていたように見える。

(3)その他：

- ・ 時間を大幅に超過した。進行のまずさと計画のまずさによる。
- ・ それでも大半の参加者が残って参画していただいた。

- ・冷静な議論をしていただくことができたことはよい。
- ・一方で、住民から見れば議論の出口（どこに活かされるのか）は明確ではないという点が不満であったとみられる。（一応、パブコメなどの情報提供もしたが、もともと収録ということも背景としてのこと、賛成反対を決する場ではないという制限が最初にかかっていたこと、なども有り。）
- ・「いま議論することが進捗を遅らせる」ことへの懸念から、議論に参加しない意識が働く、という意見はこうした企画の初期条件の限界となっている。その壁をどうするか。その硬直性の問題がもともとある。

=====

以上

20140202 13:40 現在 テキスト